

人口と集落動態からみた 弥生・古墳移行期の社会変化

吉備中南部地域を中心に

Social Changes during the Shift from the Yayoi Period to the Kofun Period
from the Viewpoints of Population and Settlement Dynamics : the Southern
Central Region of Kibi and its Surrounding Areas

松木武彦

MATSUGI Takehiko

- ①分析の視点
- ②住居数と人口の変化
- ③人口変化に関わる事象
- ④変化の要因と背景

[論文要旨]

AMSによる放射性炭素年代測定法の高精度化によって、型式学を基礎として把握されたさまざまな考古学的現象の時間幅を精確に把握することができるようになった。それにより有効性が増した作業の一つに、土器型式ごとの遺構・遺物量の算定などからする人口変動の復元がある。

本論では、弥生時代から古墳時代に向けてとくに顕著な社会の複雑化を見せた吉備中南部地域を対象に、これまでの発掘成果に基づき、当該時期の竪穴住居数・掘立柱建物その他の遺構数の変化を把握して、人口の増減や分布の変化過程をつかんだ。その結果、弥生時代から古墳出現期にかけてはこれまで想定されていた以上の人口の増加があること、とくに弥生時代中期後葉と後期とにその画期があることが判明した。

さらに、その二つの画期にそれぞれ顕在化する考古事象の検討および古環境復元研究の成果などから、中期後葉の人口急増と集落数増加は環境の安定による人口増加率の上昇に起因し、後期の人口増加と特定地域への集住、そこでの階層化・耕地開発・遠距離交易活性化などの現象は、環境の不安定化に対応する社会的再編によるもので、それが古墳時代への移行の歴史的本質であることを展望した。

【キーワード】 人口、セトルメントパターン、墓制、階層化、古環境

①……………分析の視点

弥生時代から古墳時代にかけての歴史は、一つには階層化の進展、もう一つには日本列島中央部の広い範囲にわたる統合化という、いくなればタテ・ヨコ両方向での社会の変化過程としてとらえられてきた。その過程の帰結に、階級の成立と政治的統一を前提とする古代国家の完成が措定されていたことは明らかである〔近藤1983, 都出1991〕。弥生・古墳時代の歴史叙述は、国家形成という論理的骨組を、考古資料や一部の文献史料によって肉付けする試みが専らとなってきたともいえよう。

人間社会が先史の段階を脱する過程を国家形成という骨組で論理づける見方は、史的唯物論にも人類学の社会進化理論にも共通するが、前者は生産力の発展を、後者は主として環境と人間のあいだの相互関係の変化を、歴史を動かす根本的主導力とみる点では大きく異なる。環境を重視する後者においては、環境そのものの自然的・人為的变化を実証的に明らかにする各種の植物考古学や動物考古学が育ち、村落や都市の遺跡を対象としたフィールドワークや社会発展のモデル化とともに、多くの地域で国家形成過程の解明に携わってきた。その一方で、人間そのものの営みの絶対性を重視する前者の史的唯物論の領域では、環境の視点を歴史の論理に織り込むことがナンセンスであるから、環境自体を対象とした実証研究が育つ理論的土壌はもとより存在のしようがなかったともいえる。そのかわり考古学の調査や研究にますます積極的に取り入れられつつある古環境復元や自然遺物の分析を、理論的底流として今なお残る史的唯物論にどのように関係させ、歴史叙述の枠組みを策定していくのかということは、今後の日本の考古学・歴史学にとっての大きな課題であり、本論が究極として目指すところもそこにある。

このような展望の下で環境と人間社会の歴史的な関係をあらためて考えようとするとき、その直接の接点として、環境に規定された人間集団の規模、すなわち人口の問題が、まずは出発すべき原点となる。第一に、人口は、史的唯物論が歴史動態の主動因として立脚する生産力と密接に関係している。人口は生産力に根ざし、逆に生産力は人口を規定するから、人口の復元を抜きにした生産力の実証作業はあり得ない。第二に、人類学の社会進化論が重視するように、人口は社会の複雑化のレベル（史的唯物論的にいえば社会の発展度）と密接に関連する。たとえば、「部族社会」と「首長制社会」とを区分する際に人口約500人という指標がしばしば取り上げられるように、人口と社会関係の複雑さの間には一定の相関関係の存在が想定される⁽¹⁾。このように、人口は、社会の下部構造（経済）から上部構造（社会関係）に至るまで多くの局面でその形態や変化を決定づけるものであるから、まずは何を措いても実証すべき事柄と位置づけられよう。

もとより人口の実証的な復元は簡単でない。本論では、竪穴住居の棟数を人口復元の主データとして用いるが、この数もまた、それが検出された遺跡の残存状況、調査箇所、およびその地域の開発にともなう発掘調査の進展度などによるさまざまなバイアスの影響下にあることは自明である。とはいえ、本論の分析対象である吉備中南部地域は、その内部において開発による発掘調査の進展度に著しい差はなく、そこで検出・記録された竪穴住居数は、2010年までの累計で1600棟を超える。これは、個々の遺跡の竪穴住居の棟数にかかる上記のバイアスを一定の程度平準化して、それに表

れた人口の分布や変動の巨視的な傾向をうかがうに足る数である。これに加えて、AMS放射性炭素14年代測定法の測定値などから得られた高精度の年代を土器編年に当てはめ、土器型式ごとの住居数の変化の時間幅を明らかにすることによって人口の変動を量的に推計する方法が実用化されつつある〔小林2007、藤尾2011〕。

こうした認識の下、本論では、吉備中南部地域（広義の岡山平野）の弥生時代から古墳時代初頭にかけての竪穴住居の数を、遺跡ごと、小地域ごとに時期を追って集計し、そこから上記の方法によって人口の時間的変動と空間的変異とを復元し、その要因と背景を明らかにする。さらに、そのことによって、階層化と統合という当該期の日本列島の歴史過程が、いかなる具体的な社会と経済の基盤の変化に基づくかという問題に迫る端緒とする。つまりは、定性的な変化としてとらえられてきた日本原始・古代社会史を、定量的な変化も視野に入れ直すことによって、史的唯物論にも社会進化論にも資する新たな歴史過程の記述として描き出すことを、最終的な目標としたい。

なお、吉備中南部地域を選択した理由は二つある。一つは、先に述べたように、この地域が日本でも有数の質量をもって考古学的調査が進展しているということである。もう一つは、階層化や統合などの社会変化を反映する墳墓その他の考古資料の調査・研究の蓄積度が大きく、人口の動態と社会の変化とを高い精度で照合できることである。

以下では、次の第2章で、各遺跡・各小地域の時期ごとの住居数の計数結果を提示し、AMS放射性炭素年代法で得られた各時期の実年数を加味・調整して住居数の真の変動を割り出し、該期における吉備南部地域の人口の時間的変動と空間的変異を復元する。続く第3章で、その変異や変動が他のどのような考古学的事象と伴っているかを確認し、その要因や背景について最後の第4章で展望したい。

②……………住居数と人口の変化

本章では、吉備中南部の各遺跡で検出された竪穴住居を、時期および地域ごとにあとづけるが、作業に先立って、分析の縦横の軸となる時期と地域の区分を明確にしておく。

まず、時期は、対象とする弥生時代から古墳時代初頭にかけて、実年代でいえば紀元前10世紀頃から紀元後3世紀頃までの約1300年間を、土器編年に従って下記の十の小期に分ける。①弥生時代前期前葉（津島式）、②同中葉、③同後葉（門田式）、④弥生時代中期前葉（南方式）、⑤同中葉（菰池式）、⑥同後葉（前山Ⅱ式・仁伍式）、⑦弥生時代後期前半（上東鬼川市Ⅰ・Ⅱ式）、⑧同後半（上東鬼川市Ⅲ式～才の町Ⅰ・Ⅱ式）、⑨古墳時代前期前半（下田所式・亀川上層式）、⑩同後半～中期前半。なお、⑨の下田所式は、弥生時代終末とみる人も多い畿内の庄内式におおむね併行するが、多くの人が古墳時代初頭とする「布留0式」にもまたがっている可能性がある。新古の区分が難しいので、ここでは「古・前・Ⅰ」と総称する吉備地域の編年の伝統に従って古墳時代前期前半としておく。

次に、本論が対象とする吉備中南部地域は、現在の行政単位名でいえば岡山県南部の備前市・瀬戸内市・赤磐市・岡山市・倉敷市・総社市にまたがる範囲で、自然地理的には東から吉井川・旭川・高梁川の「岡山三大河川」と、それぞれの間を流れる赤磐砂川（吉井川と旭川の間）、笹が瀬川・一宮砂川・足守川（以上は旭川と高梁川の間）などの中小河川が形成した沖積平野である（図1）。本論

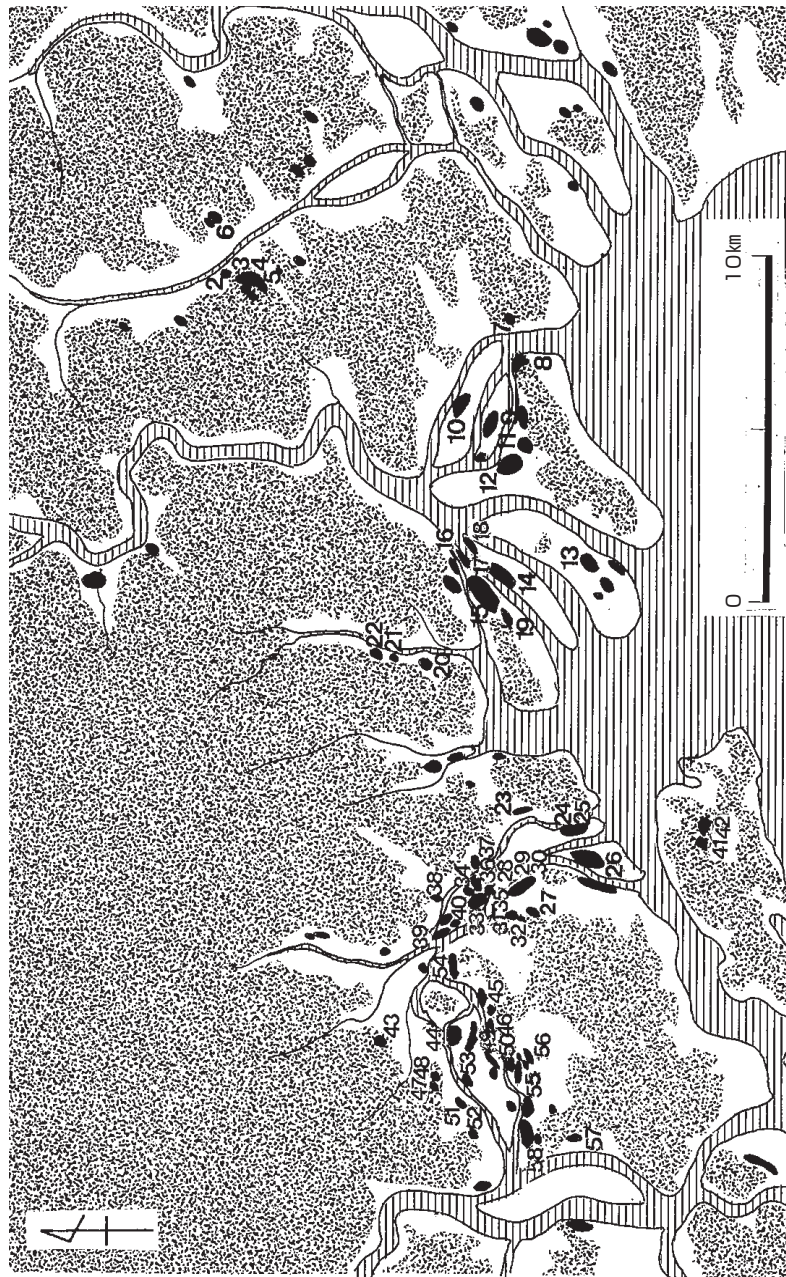


図1 吉備中南部における弥生時代集落遺跡の分布（遺跡番号は表1の記載順）

- A (1) 1 船山
- B (2-6) 2 門前池 3 用木山 4 惣図 5 新宅山 6 斎富
- C (7-12) 7 目黒上山 8 百間川米田 9 百間川兼基・今谷 10 雄町 11 百間川沢田 12 百間川原尾島
- D (13-19) 13 鹿田 14 南方 15 津島 16 津島江道 17 北方長田 18 北方下沼 19 伊福定国前
- E (20-22) 20 大岩 21 田益新田 22 田益田中
- F (23-42) 23 吉野口 24 中撫川 25 下庄 26 上東 27 矢部堀越

では、これらの地域を、東からA 吉井川下流域（現・瀬戸内市・備前市および岡山市東区）、B 赤磐盆地（現・赤磐市）、C 旭川東岸（現・岡山市東区）、D 旭川西岸（現・岡山市北区・中区）、E 笹が瀬川・一宮砂川流域（現・岡山市北区）、F 足守川流域（現・岡山市北区および倉敷市）、G 高梁川東岸（現・総社市）の7小地域に分ける。ただし、Aは調査事例がきわめて少ないので、今回の分析対象にはなりにくい。

以上の10小期・7小地域区分に沿って遺跡ごとの竪穴住居数（以下、「住居数」と略称する）を集計したのが表1である。補助的なデータとして掘立柱建物も計数した。最下欄には、まず、小期ご

とに計数した住居総数を示し、さらに、AMS放射性炭素年代法で求められた各小期の継続年数をもとに、それを30年間に換算したときの住居総数を割り出して、より実態に近い住居総数の動きをつかもうとした。30年としたのは、その年数がしばしば一般的に「1世代」とされることによる。なお、掘立柱建物数についても同様の数的処理を行った。

この数的処理のもとになる各小期の継続年数は、国立歴史民俗博物館によるAMS放射性炭素14年代測定法の算出値を吉備中南部の土器編年に当てはめることによって導いたもので、①弥生時代前期前葉が600BC以前、②同中葉と③同後葉が600-375BCの225年間、④弥生時代中期前葉と⑤同中葉が375-175BCの200年間、⑥同後葉が175BC-25ADの150年間、⑦弥生時代後期前半がAD25-100の75年間、⑧同後半がAD100-200の100年間、⑨古墳時代前期前半がAD200-300の100年間、⑩同後半がAD300-400の100年間とする。

さて、30年換算住居総数の時間的変動をあとづけると、その変化は三つの大きな段階に分けられることがわかる。第1段階は弥生時代前期から中期中葉までで、住居数はゆるやかな増加傾向にあるが、全体として数が少ない。この傾向が大きく変化する第2段階は弥生時代中期後葉に当たり、30年換算住居総数は、短期間に前時期の5倍程度に急増する。掘立柱建物の総数にも同じ傾向がみられる。第3段階は、弥生時代後期から古墳時代前期前葉にかけての時期で、前段階に急増した住居総数はさらに増えて安定する。その一方で掘立柱建物数は、下落するか、横ばいである。このように、吉備中枢部では、竪穴住居数は弥生時代を通じて増加するが、初めの三分の二を占める期間にはその程度は緩やかで（前期～中期前葉）、そのあと著しい急増の時期（中期後葉）をはさみ、なお順調な増加の傾向を保った末に（後期）、古墳時代を迎えたことが明らかである。

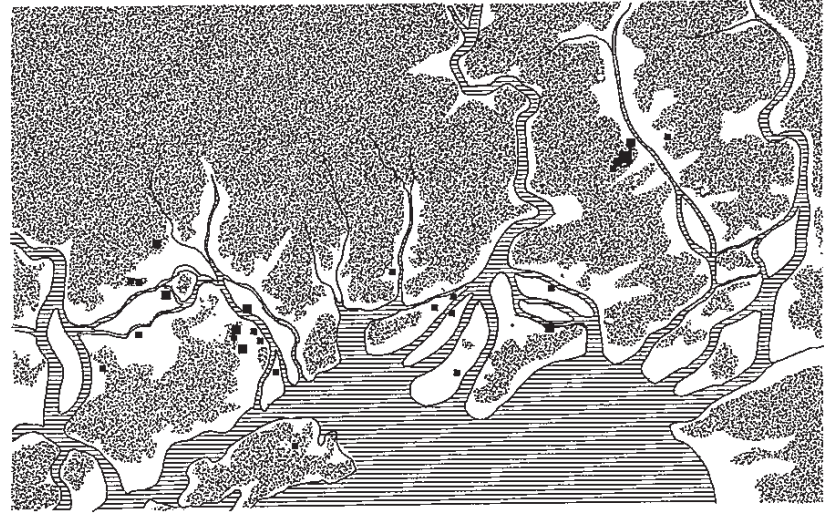
次に、上記の過程でみえる住居数の空間的な変異に注意すると、緩やかな増加期である第1段階は、旭川東岸・西岸および高梁川東岸に、その分布はほぼ限られている（図2左上）。これらの地域は、いずれもそれに先立つ縄文時代晩期に集落が形成されていたところ（百間川沢田、津島、南溝手）であることから、こうした古くからの居住地が拡大する形で住居の漸増が生じたことがうかがえる。これに対して第2段階は、住居は各小地域でほぼ万遍なく増加している（図2右上）。赤磐盆地や笹が瀬川・一宮砂川流域のように、前時期までは住居が確認されていなかった小地域にも、この時期以降は住居がみられるようになる。とくに赤磐盆地におけるこの段階の急増は目覚ましい。第3段階になると、その赤磐盆地や高梁川東岸で住居数が減少に転じる一方で、足守川流域で住居の増加がとくに顕著になる（図2左下）。古墳時代前期前半には、吉備中枢部全域のうちの約64%の住居が足守川流域に集中し、分布の明確な重心が形成される（図2右下）。第3段階の住居数の順調な増加は、実情は足守川流域への集中化であることがうかがえる⁽³⁾（表1）。

以上にみえてきた住居数の時間的変動と空間的な変異は、大局としては吉備中南部地域の人口の変化と変異を反映するものとみることができよう。すなわち吉備中南部では、弥生時代の前半すぎまで人口は長期的に漸増し、中期後葉に爆発的に増え、その後古墳時代に入るまで増加傾向が保たれた。ただしその経過は空間的な変異を含んでおり、中期後葉の急増が地域全体でほぼ万遍なく生じたのに対し、後期の増加は足守川流域という人口集中地帯の形成という現象をはらんでいた。

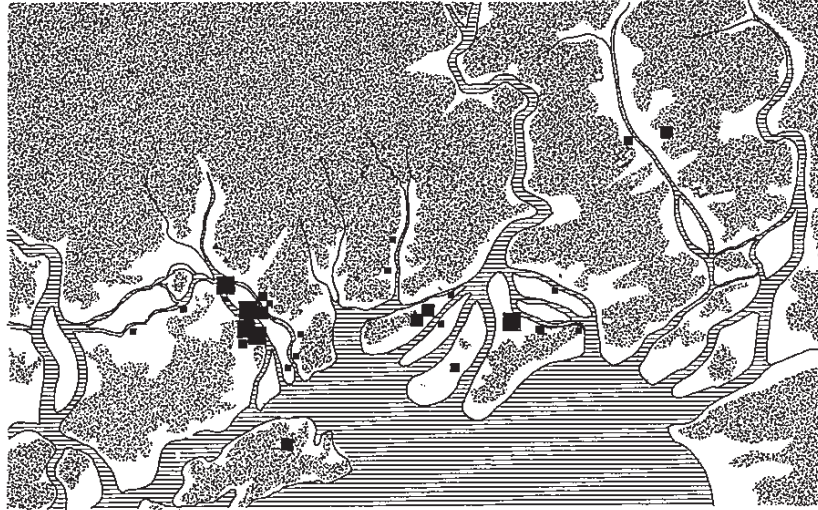
弥生時代前期～中期中葉



弥生時代中期後葉



弥生時代後期



古墳時代前期前半

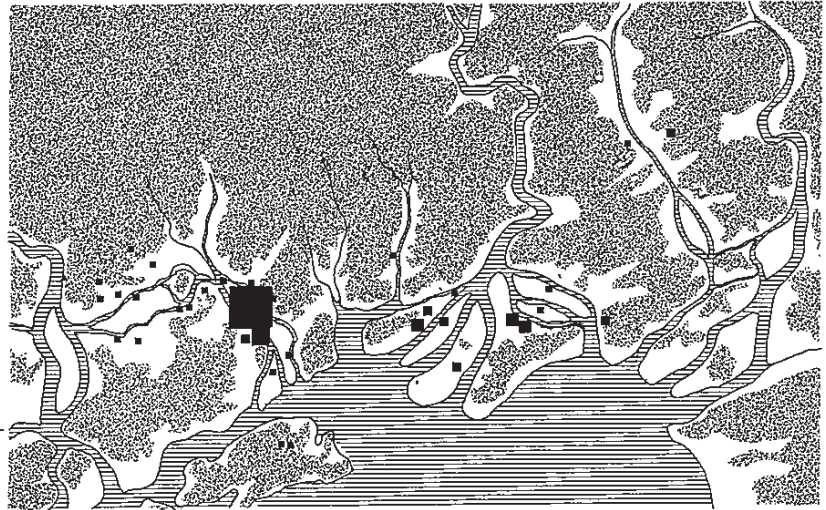


図2 竪穴住居分布の時期的変遷

表1 地域別・遺跡別・時期別の住居数・建物数の変化(遺跡名斜体は丘陵性立地)

地域名	遺跡名	弥生前期			弥生中期			弥生後期		古墳前期 前半	古墳前期 後半
		前	中	後	前	中	後	前	後		
A	船山				1						
	門前池						22	10	4	2	
B	用木山						68				
	惣囷						40				
	新宅山						6				
	新宅山						1				
	斎富						3	24	1	14	18
C	目黒上山									1	
	目黒上山									15	
	百間川米田								2		
	百間川米田								1		
	百間川兼基・今谷				4	7	15	5	6	8	20
	百間川兼基・今谷					34	25	1	6	1	18
	雄町				2	1	3	6	1	9	
雄町					1						
D	百間川沢田		7							28	2
	百間川沢田									20	
	百間川原尾島		1	4				47	51	34	5
	百間川原尾島							17	6	1	
D	鹿田						5	5	7	11	
	鹿田										
	南方				1	2	6		1	11	
	津島		1			6	3	3	25	19	10
	津島		1								
	津島江道							1	2		
	津島江道										
E	北方長田						1	2		1	
	北方下沼										5
	伊福定国前								31	28	
	大岩						3		8		
	大岩								1		
	田益新田									8	
F	田益新田								2	12	
	田益田中		1						1		1
	田益田中						1				
	吉野口					5			2		
	吉野口					1					
	中撫川								1	1	
	中撫川										
	下庄								1		
	下庄								2		
F	上東						2	2	4	5	1
	上東										
	矢部堀越						19				
	矢部堀越						3				
	足守川矢部南向						1	28	25	22	
	足守川矢部南向						1				
F	足守川加茂B						2	18	36	76	
	足守川加茂A							1	19	14	
	足守川加茂A										

地域名	遺跡名	弥生前期			弥生中期			弥生後期		古墳前期 前半	古墳前期 後半
		前	中	後	前	中	後	前	後		
F	前池内・後池内						12				
							7				
	黒住雲山						4				
							3				
	津寺					1	17	49	18	264	1
						1	7	5		3	
	津寺三本木							5		6	
	津寺一軒屋										2
	加茂政所					10		12	26	7	
						1					
	高松原古才					1		1	3		
	立田					1		1	12		
								2			
	高塚							33	60	9	36
								2			
三手向原										2	
奥坂							7	11	20	6	
							5	6			
天神坂								5		6	
G	千引						13				
	南溝手		2		4		12	6			
			1		3		39				
	窪木	3		6	3	22	1	5	1		
							8	9	1		
	窪木薬師							1		9	4
	西山						5				
							1				
	中山						2				
							9				
	井手天原									7	1
	井手見延								3		1
	金井戸新田									6	
	諸上									1	
	大文字									1	
	鶴亀									1	
	三須畠田							1	7	1	
三須美濃田									1		
殿山							2				
樋本										1	
時期別住居総数		3	16		52	272	301	368	637	102	
時期別掘立柱建物総数			2		43	152	45	18	39	19	
30年換算住居数			1.7		7.8	40.8	120.4	110.4	191.1	40.8	
30年換算掘立柱建物数			0.2		6.5	22.8	18	5.4	11.7	7.6	

③……………人口変化に関わる事象

前章でみた人口の時間的変動と空間的変異は、社会のどのような変質や質差形成の過程や構造と関連するのであろうか。こうした問題を考えるために、本章では、人口に関する事象が、他のどのような考古学的事象と連動しているかを確認したい。

他の考古学的事象とは、第一に、一遺跡内の住居相互の関係、および遺跡（集落）間の関係という、ミクロ・マクロ両レベルでのいわゆるセトルメントパターンで、実際の・暗黙的な社会関係をもっとも直接的に映し出す要素である。第二は墓で、血縁や社会的威信など、ホモ・サピエンス社会でとくにクローズアップされそうな社会関係の象徴的・言説的な局面を比較的よく演示する要素である。第三は、そうした社会関係の経済的基盤を反映する要素で、一義的な生産力を示す耕地、分業と関係する手工業生産の痕跡、遠距離交易を示唆する他地域由来の土器（非在地系土器）やその他の文物などが例としてあげられる。

(1) セトルメントパターン

まず、マクロのレベルに属する遺跡間関係の変化をみると、遺跡数が漸増する第1段階には、長期的に安定した拠点となる明確な居住地は、各小地域とも見出しにくい。たとえば旭川東岸では、弥生時代前期中葉には百間川沢田、同後葉には百間川原尾島、中期前葉～中葉には百間川今谷・兼基というように、ある程度の住居が集まる場所が、小地域の中で移動している。旭川西岸でも、前期には津島、中期には南方というように、主居住地の移動がみられる。高梁川東岸では、前期から中期にかけての主居住地が南溝手と窪木とにあるが、断絶もあって安定的ではない。以上のことから、第1段階における集落相互の関係は、住居そのものが少なく散漫であることともあいまって、安定した居住拠点を核とする中心—周辺的なセトルメントパターンが確立していたとはみなしがたい。

ただし、この段階の最終局面である中期中葉になると、7基の住居に30棟以上からなる掘立柱建物群が伴う旭川東岸の百間川兼基・今谷や、10基の住居が集まる足守川流域の加茂政所のように、居住地の大規模化や機能区分らしきものが認められるようになる。これらの居住地が、次の第2段階、すなわち中期中葉に顕在化する各小地域の中心—周辺的なセトルメントパターン形成の核になっていく。図2左上は、前期中葉～中期前葉の住居の分布を示したものであるが、10棟以上の住居集まりを示すやや大きいマークは、いずれも中期中葉に属する。

第2段階には、10数基～数10基の住居とそれに伴う掘立柱建物群をもつ、それまでになく大規模で濃密な集落が各小地域の中央部に現れる。赤磐盆地の用木山、旭川東岸の百間川兼基・今谷、高梁川東岸の南溝手がその例である。さらに、それぞれの周辺部には、数基～10数基の住居と掘立柱建物からなる中・小規模の集落が現れる。図2右上に示すように、核となる中央部の大規模集落を中・小集落が取り巻く中心—周辺的なセトルメントパターンが、第2段階には各小地域に成立してくる状況が認められる。なお、中心的な集落は平野部に、周辺的な集落は平野部と丘陵部に立地する場合が普通であるが、赤磐盆地では中心的集落の用木山も他の周辺の集落とともに丘陵部

にあり、足守川流域でも同じような様相を想定する意見がある〔宇垣1999〕。

第3段階になると、上記のようなセトルメントパターンは各地で解体し、とくに丘陵部に展開していた集落は、赤磐盆地の用木山のような中心的集落も含めて、ほとんどすべてが衰滅する。これに代わるように、赤磐盆地では斎富、旭川東岸では百間川原尾島、旭川西岸では津島、高梁川東岸では窪木といった平野部の集落が、それぞれ盛期に細かい差はあるが、数10基の住居を擁して居住地としての中心性を高める〔宇垣1999〕(図2左下)。この段階に、住居が著しく集中して吉備中南部の人口重心となる足守川流域では、高塚、加茂政所、足守川加茂B、足守川矢部南向など、他の各小地域の中心的集落に比肩する規模をもった大規模集落が、南北約4km、東西約1.5kmの範囲に接続して、人口密集地帯を形成しはじめる。この段階の後半である古墳時代前期前半になると、この現象はさらに顕著となる(図2右下)。

このように、集落相互の関係を軸とするマクロレベルのセトルメントパターンをみると、第2段階の人口急増期には各小地域に分散した人口がそれぞれに膨張して、小地域ごとに中心一周辺的な人口分布の様相がうかがえるのに対し、第3段階の人口増加期には、特定の小地域の特定の箇所に著しい人口が集まり、吉備中南部全体で、足守川流域を中心とし、その他の小地域を周辺とするような人口分布の基本構造が形成される状況が見てとれる。

以上にみてきたマクロレベルのセトルメントパターンに対し、遺跡内の住居の相互関係を追究するミクロレベルのセトルメントパターン分析は、方法的にやや難しい側面を残している。このレベルの分析には、単位集団や基礎集団、居住集団や出自集団など、歴史学の一般理論や民族誌の分析などに由来する理念的な集団をあらかじめ設定し、発掘調査で検出された住居や建物の平面にそれを当てはめるといった演繹的な操作が不可避であるからで、ときに恣意的な解釈が入る余地がないとはいえない。したがって、吉備中南部を対象とするそのような推論的な考察は別稿に譲ることとし〔松木2013〕、事実関係の数量的分析に根ざすことを旨とする本論では、ミクロレベルのセトルメントパターンについて、次の事実注意到意するにとどめたい。

弥生時代前期～中期中葉の第1段階には、堅穴住居の建て替えや重複がほとんどみられないのに対し、中期後葉の第2段階以降になると、ほぼ同じ場所で住居を建て替えたり拡張したりする例が普通に出てくる。このことは、第一に、住居の使用年数に変化がないとすれば、一箇所に継続して住む期間が伸びたこと、すなわち居住地の安定度が長期化したことを示唆する。第二に、同じ場所に住居の建て替えを重ねることは、そこに居住したグループの累世的な継続性が高まったことの証左とみられるとともに、そうしたグループが、居住地の歴代占地という行為を媒介に、資産の保有や継承の単位ともなりつつあった状況を示唆するものでもあろう。

(2) 墓

吉備中南部を中心とした弥生時代の墓の変化についてはかつて検討したので〔松木2000・2009〕、それを概述する形で、第1章でみた人口の変化の諸段階に沿ってあとづけたい。

まず、人口が長期的に漸増する第1段階の弥生時代前期から中期中葉にかけては、墓は木棺墓や土壙墓として居住地の中に営まれ、南溝手で推測されているような緩い群構成をみせることもあるが、独立した墓地を形成することがない。このことから、さまざまな社会関係を墓に表示する意図

は、その後の時期に比べて薄かったと考えられる。ただし、第1段階の最終局面である中期中葉には、南方で想定され、その後津島の調査でその一端が確かになったような、先行する墓壙の一部に自らの墓壙の端を重ねるように接続させていく埋葬法が居住域に接する場所に現れる。先行する死者との個人的つながりの表示という形で、社会関係を墓に表示する行為がなされ始めた状況がうかがえる [溝口 2001]。

人口急増期である第2段階の中期後葉には、墓にも新たな動きが出てくる。第一に、墓が営まれる区域(墓域)が居住域から独立して、やや離れた丘陵尾根上などに営まれるようになる。そこでは、墓どうしの接続をもって個人相互のつながりを演示する行為の累積により社会的関係を描く、集塊状の墓群が展開される。墓域の中には、見かけ上は散開するものもみられるが、これは集塊形成の途上を示している可能性があるので、基本的には集塊状をなす1墓群が何らかの社会集団の紐帯や伝統を対内的・対外的に表示することが第2段階の墓の特質であったとみてよい。

第3段階である後期の墓の推移にみられる最大の特質は、これらの墓群の相互間で、区画ないし墳丘の有無や規模、墓壙や棺の大きさ、副葬内容などによる階層的な格差の表示が顕著になることである。そのもっとも上位に置かれるのは足守川流域の楯築墓で、径約40mの主丘部の2方向に突出部が付く大規模かつ特異な墳丘と、立石や特殊器台に代表される外表施設などによって他との差異化を志向する。木槨木棺に朱や各種副葬品を容れる入念な埋葬で際立たされた中心埋葬はあるが、その他にも複数の埋葬をもつ集団墓とみなされる。楯築墓を筆頭に、それに次ぐ規模や内容をもつ雲山鳥打墓や鯉喰神社墓などの有力集団墓の例が、人口集中地帯である足守川流域に集まることには注意すべきであろう。いっぽう、一般層の墓域として、前段階以来の集塊状をなす集団墓域は各小地域に普遍的に残る。

以上のように、第3段階における集団墓域の階層化は、大規模で入念な埋葬に祀られるべき威信や地位を付託された特定の人々が析出された状況を示唆する。重要なのは、弥生時代でもっとも顕著に人口の増加と集中が生じた弥生時代後期の足守川流域において、こうした状況が先駆的かつ明確な形をとって顕れることである。

(3) 経済的指標

経済的な事柄としてあげられる耕地開発、手工業、遠距離交易をそれぞれ示す考古学的証拠は、いずれも、第2段階の人口急増期である中期後葉と第3段階の人口増加期である後期とに出現するが、とくに後者の時期に顕著である。

耕地は、考古学的証拠のうちでは比較的把握しづらく、削平などを受けやすいために、一ヶ所でその継起的推移を追うことは困難であるが、吉備中南部の一般的傾向として、体系的な用水施設を備えた大規模な水田が弥生時代中期後半以降に集中することは明らかである。人口の集中が著しい足守川流域では、後期前半(上限は中期末)の津寺に大規模な水田開発の痕跡があり [亀山 1997]、同じ後期前半の上東に「波止場状遺構」といわれる大規模な堤状構造物が築かれている。足守川流域に次いで多くの住居が集中した旭川東岸では、後期前半新段階に百間川今谷で [物部 2009]、後期後半古段階に百間川原尾島で [柳瀬 2006]、それぞれ大規模な水田開発が行われた痕跡が明らかにされている。

手工業で明確な痕跡を残すのは、吉備中南部においては土器製塩である。製塩専用の土器は弥生時代中期後葉に現れ、後期には足守川流域の上東などで比較的大規模な製塩炉が知られている。旭川東岸・西岸などでも、集落からの製塩土器の出土は後期に一般的である。

金属器の本格的普及の端緒も、弥生時代中期後葉にある。鉄鏃などの小型鉄器に用いる素材がこの時期から吉備中南部にもたらされるようになるほか〔松木1999〕、銅鐸を中心とする青銅製祭器の伝播も、それらの型式からみて中期後葉に盛期があった可能性が高い。後期に入ると鉄器の量は順調に増大し、青銅器も、祭器は衰退するが、銅鏃を中心とする小型品はむしろ後期以降に増加する。これら金属器の素材は、その加工技術とともに北部九州や近畿中央部などから、遠距離交易を媒介として吉備中南部に流入していたと考えられる。なお、こうした金属器の製作や保有は、足守川流域の集落でとくに卓越することが指摘されている〔江見2000〕。

非在地系土器は、吉備中南部の各小地域で弥生時代後期後半を中心に目立つようになる。小地域間や集落間でその程度に差がある中で、もっとも多く地域の多数の土器が発見されるのは足守川流域の津寺である。津寺で確認される非在地系土器は、山陰、四国、近畿中央部、西部瀬戸内、東海、北陸などに、それぞれ由来する〔亀山1996〕。これらには搬入品と模倣品とがあるが、いずれの場合であっても、上記のような遠隔の地域から土器やその情報をたずさえて津寺にきた人々がいたことを示している。推論の域を出ないが、津寺を中心とする足守川流域へ集中した人口のうちには、そうした遠隔地からの流入者も少なからず含まれていた可能性がある。

④……………変化の要因と背景

これまでの各章で、弥生時代から古墳時代に向かう時期の吉備中南部地域における人口の時間的変動と空間的変異をたどり、それが社会内部に生じたどのような事象に関連するかを見きわめようとしてきた。そこで明らかになったのは、次の通りである。

まず、弥生時代前期から中期中葉にかけての長期にわたる人口漸増期には、社会の複雑化を反映する要素は概して希薄で、各小地域の間で社会構造の質的変異を示すような事象も見出しがたい。農耕を中心とした生業の持続的で緩やかな発展傾向を生起しつつ、人間自体の再生産とその生の営みが繰り返されたような状況が復元できる。これに対して、その後の中期後葉にみられる人口の著しい急増は、こうした人間自体やその営為の再生産のしくみやリズムが質的に変化したことを示す。このときの人口の急増が、内的な再生産によるものか、外的な人口の流入が影響した結果かは、人口の動きそのものからは確定しがたい。しかしながら、先に述べたように、この時期の人口の急増は各小地域でほぼ万遍なくみられることや、他地方からの人口の流入を示す遠隔地産文物も後の弥生後期ほど顕著でないことから、現状では主として内的な再生産によるものであったと考えられる。弥生時代中期後葉の吉備中南部では、人口増加率の上昇を許すような何らかの要因が働いた可能性が高い。このような中期の状況に対し、後期の人口増加は特定小地域への著しい偏在化を招いたもので、この動きの極となった足守川流域では外部からの流入も大きな動因となって人口が密集し、その稠密化した人口を培養器として、階層化、協業や開発の進展、遠距離交易の比重の増大などの社会変化が生じた。

以上のように前期～中期中葉、中期後葉、後期のそれぞれの間でみられ、それぞれの社会の質差を生み出す基盤となった人口動態の違いは、何によってもたらされたものであろうか。

第一の考えは、農耕の開始と、技術の進歩も含むその順調な発展のうちの画期ととらえる見解である。しかし、画期論ともいべきこの見解では、人口増加のカーブに際立った差が生じるという画期自体の形成理由が十分に説明されない。また、中期の急増が各小地域で内的に均等に生じたのに対して後期の増加が偏在化をはらんでいた理由など、動態の具体的内容を実情に即して説明する手段をもたない。このような理念的な理由づけで推し量られるレベルを超えて、人口や生産力の実態復元は精緻の度を増しつつあるのである。

第二の考えは、人口の変動や変異の説明に環境的要因を織り込む態度である。近年の考古学とその関連科学では、環境の変化を、堆積物、動植物遺体、樹木年輪中の元素などの各種の分析媒体を通じて、短期から長期に至るさまざまな時間尺度で詳細に追跡する方法が急速に整いつつあり、弥生時代から古墳時代への移行期の環境についてもすでにさまざまな分析の結果が明らかにされている [今村・松本 2011, 金原 2011, 中塚 2010]。人口や生産力に、自然環境の変化が具体的にどのようなインパクトを与えたのかという問題に実証的に迫りうる可能性が生み出されつつあるといえる。

弥生時代の中期後半と後期とのあいだにみられる人口動態の相違の背景の問題に関していえば、前者の時期が総じて温暖な環境であり、後者が寒冷期に向かう不安定な気候が卓越する時期であった可能性が、近年ではほぼ共通の認識となっている。むろん、そうした分析の成果を安易に考古資料と付会することは危険であるが、もしそうした環境の変化が実際に生じたとすれば、それが、人口やそれを支える生産に大きな影響を与えたであろうことは否定しがたく、順調な発展のうちの画期とはみなしがたい急速な人口の変化はそれによるものとする仮説の蓋然性は高まる。

この仮説の検証は今後の課題であるが、今後の展望として具体的に推測すると、中期後葉には、主として温暖で安定した傾向をもった気候が続く環境の下、食糧生産は総じて順調に行われ、それが環境収容力の平均値を各地域において底上げし、人口増加率が増した可能性が考えられる。これに対して、後期には環境の不安定化によって食糧生産は危機に面し、それが社会的にも認識された結果、主として金属器による生産技術の革新、大規模な協業による開発やそれを進めるための意図的な集住、階層化をはらむ集団関係の再構成など、社会や文化の側からの環境変化への対応として次の古墳時代社会につながるような再組織化が生じたと推測される。対外関係など、ほかにもさまざまな個別要因がこの再組織化に働いたと考えられるが、その細部については爾後の実証的究明を待ちたい。

本論の分析成果の一部には、科学研究費基盤研究 B「縄文・弥生社会の人口シミュレーションと文化変化モデルの構築 (課題番号 20320123, 研究代表者 松本直子)」が含まれている。

註

(1)——この点については、認知心理学・認知人類学からの分析も進んでいる [Dunbar,1992,et.al]。

(2)——吉備南部地域全体で竪穴住居数の時期ごとの変化をたどった先駆的な作業として、重根弘和氏の研究 [重根 2002] 氏の研究がある。本論は重根氏の研究を基礎と

し、それに導かれたところが多い。

(3)——この時期の足守川流域の人口稠密化については、草原孝典氏が遺構密度の分析から詳しく検討している [草原 2009]。

引用・参考文献

- 今村峯雄・松木武彦 2011「炭素14年の記録から見た自然環境変動—弥生時代後期から古墳時代」（設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『古墳時代への胎動』弥生時代の考古学4，同成社，pp.28-37）。
- 宇垣匡雅 1999「吉備弥生社会の諸問題」（考古学研究会岡山例会委員会編『論争吉備』シンポジウム記録1，考古学研究会，pp.81-102）。
- 江見正己 2000「第3章第4節1. 弥生時代の集落変遷」（江見ほか編『高塚遺跡・三手遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150，日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会，pp.999-1002）。
- 江見正己ほか編 2000『高塚遺跡・三手遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150，日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会
- 岡田 博ほか編 1997『窪木遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告120，岡山県教育委員会
- 金原正明 2011「花粉分析からみた弥生後期の気候冷涼化の実態」（設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編2011『古墳時代への胎動』弥生時代の考古学4，同成社，pp.15-27）。
- 亀山行雄 1996「第5章第4節 古墳時代初頭の土器」（亀山行雄編『津寺遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104，日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会，pp.226-242）。
- 亀山行雄 1997「第5章第1節 縄文～弥生時代の津寺遺跡」（亀山行雄・大橋雅也編『津寺遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116，日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会，pp.599-607）。
- 草原孝典 2009「弥生時代後期から古墳時代初頭の足守川流域の集団関係」（草原編『津寺（加茂小・体育館）遺跡』岡山市教育委員会，pp.122-133）。
- 小林謙一 2007「AMS¹⁴C年代測定試料の検討と縄紋住居居住期間の推定」（『考古学研究』54-2，pp.50-69）。
- 近藤義郎 1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- 近藤義郎 1986「雲山鳥打弥生墳丘墓群」（近藤ほか編『岡山県史』第18巻 考古資料，pp.182-183）。
- 近藤義郎編 1992『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会
- 酒井龍一 1982「畿内大社会の理論的様相—大阪湾沿岸における調査から—」（中西靖人・宮崎泰史・西村尋文編『亀井遺跡』，（財）大阪文化財センター，pp.239-251）。
- 阪口 豊 1984「日本の先史・歴史時代の気候—尾瀬ヶ原に過去7600年の気候変化の歴史を探る—」（『自然』39-4，pp.18-36）。
- 重根弘和 2002「岡山県南部の弥生時代集落遺跡」（『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』下巻，古代吉備研究会，pp.343-362）。
- 柴田英樹 1999「第2章第2節 弥生時代の集落」（平井泰男・弘田和司・柴田英樹編『加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138，日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会，pp.782-785）。
- 高久健二 2011「楽浪・帯方郡との関係」（設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編2011『古墳時代への胎動』弥生時代の考古学4，同成社，pp.39-53）。
- 高田恭一郎 2008「第5章 まとめ」（高田編『百間川原尾島遺跡7・百間川二の荒手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215，国土交通省岡山河川事務所・岡山県教育委員会，pp.163-172）。
- 團 奈歩編 2005『津島遺跡6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告190，岡山県教育委員会
- 都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」（『日本史研究』343，pp.5-39）。
- 出宮徳尚編 1971『南方遺跡発掘調査概報』岡山市教育委員会
- 中塚 武 2010「気候と社会の歴史を診る樹木年輪の酸素同位体比からの解説」（和田英太郎・神松幸弘編『安定同位体というメガネ—人と環境のつながりを診る』昭和堂，pp.38-58）。
- 平井 勝 1999「岡山における弥生時代のムラとクニ—投馬国から吉備国へ—」（『古代吉備』21，pp.79-119）
- 平井泰男ほか編 1995『南溝手遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100，岡山県教育委員会
- フェイガン，B.（東郷えりか訳） 2005『古代文明と気候大変動—人類の運命を変えた二万年史』河出書房新社
- 藤尾慎一郎 2011『〈新〉弥生時代：五〇〇年早かった水田稲作』（歴史文化ライブラリー）吉川弘文館
- 松木武彦 1999「岡山地域における弥生時代鉄鎌の展開」（『古代吉備』第21集，pp.58-78）。
- 松木武彦 2000「三世紀のキビのクニ」（考古学研究会例会委員会編『三世紀のクニグニ・古代の生産と工房』シンポジウム記録3，考古学研究会，pp.3-32）。
- 松木武彦 2009「墓制からみた吉備弥生社会」（発表資料）（『吉備弥生社会の新実像』考古学研究会岡山例会第14回

-
- シンポジウム資料, 考古学研究会岡山例会, pp.11-20)。
- 松木武彦 2010 『吉備地域における巨大古墳形成過程の研究』2006-2009年度科学研究費基盤研究(B)成果報告書
- 松木武彦 2013 「墓と集落および人口からみた弥生・古墳移行期の社会変化—吉備南部を対象として—」(『古代吉備』第25集, pp.1-21)。
- 溝口孝司 2001 「弥生時代の社会」(高橋龍三郎編『村落と社会の考古学』朝倉書店, pp.135-160)。
- 物部茂樹 1997 「第二章 前山遺跡の調査」物部編『前山遺跡・鎌戸原遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告115, 岡山県教育委員会
- 物部茂樹 2009 「第4章第1節 遺構について」(物部茂樹・團奈歩編『百間川今谷遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告217, 国土交通省岡山河川事務所・岡山県教育委員会, pp.187-197)。
- 柳瀬昭彦 2006 「第4章第4節 弥生～古墳時代の集落変遷」(『百間川原尾島遺跡6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告179, 国土交通省岡山河川事務所・岡山県教育委員会, pp.293-300)。
- 若林邦彦 2001 「弥生時代大規模集落の評価:大阪平野の弥生時代中期遺跡群を中心に」(『日本考古学』12, pp.35-54)。
- Dunbar, R.I.M.,1992. "Neocortex size as a constraint on group size in primate," *Journal of Human Evolution*, vol20,pp.469-492

(岡山大学大学院社会文化科学研究科, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2012年12月7日受付, 2013年3月26日審査終了)

Social Changes during the Shift from the Yayoi Period to the Kofun Period from the Viewpoints of Population and Settlement Dynamics: the southern central region of Kibi and its surrounding areas

MATSUGI Takehiko

Improved accuracy of the AMS (Accelerator Mass Spectrometry) radiocarbon dating method enabled researchers to precisely estimate the duration of archaeological phenomena apprehended based on the typology. One of the works whose validity was enhanced by the AMS technique is simulation of demographic changes based on the estimated amount of remnants of buildings and objects of each ceramic typology.

This article reveals the change process of the number and distribution of the population in the southern central region of Kibi, where the society grew particularly complicated from the Yayoi period to the Kofun period. To this end, this research examined the changes of the number of dugout houses, horitate-pillared buildings (buildings with pillars embedded directly into the ground), and other construction remnants during the related period, based on previously excavated materials. The results discovered that the population from the Yayoi period to the beginning of the Kofun period, especially in the latter half of the Middle Yayoi period and in the Late Yayoi period, increased more than previously assumed.

Moreover, paleoenvironmental reconstruction studies and further examinations on archaeological phenomena during the above-mentioned two periods of population growth revealed the reasons behind these increases. In the latter half of the Middle Yayoi period, the high population growth rate due to the environmental stability raised the number of population and settlements. In the Late Yayoi period, the population growth and its concentration in certain areas as well as phenomena such as the stratification of society, the cultivation of land, and the activation of long distance trade were attributed to social restructuring to deal with environmental destabilization. This article further develops the argument that the social restructuring was the historical essence of the shift toward the Kofun period.

Key words: Population, Settlement pattern, Burial systems, Social stratification, Paleoenvironment
